

環境アセスメント学会 生態系研究部会 第33回定例会 報告

■テーマ：(株)ブリヂストンの環境の取り組み ～生物多様性ノーネットロスに向けて～

■話題提供者：株式会社ブリヂストン コーポレートコミュニケーション本部

サステナビリティ推進部長 稲継 明宏 氏

■コーディネータ：大日本コンサルタント株式会社 新井 聖司 氏

■日時：平成31年3月1日(金) 18:30~20:00

■場所：東京都市大学 渋谷サテライトクラス教室

■共催：東京都市大学環境学部共催

■概要：

持続可能な開発目標(SDGs)に代表されるように、いまや社会・経済の基盤である自然資本の保全は、持続可能な社会の構築に向けた世界共通の目標となっている。国内外の多くの先進企業では、これをビジネスチャンスと捉え、経営戦略に組み込む動きが始まっている。また、環境・社会・ガバナンスに配慮した企業への投資を行う ESG 投資についても市場が拡大している。本定例会では、世界シェアトップのタイヤメーカーである株式会社ブリヂストンの環境への取り組みについて、特に生物多様性保全に関する取り組みを主としてご紹介いただいた。

はじめに、株式会社ブリヂストン・稲継様よりご講演いただき、ブリヂストンの企業理念と経営方針、環境経営活動の取り組み、資源循環・CO₂削減の取り組み、自然共生に関する取り組み、長期目標である「生物多様性ノーネットロス」の考え方などについてご説明いただいた。生物多様性に関する取り組みとしては、影響の最小化(生産活動における環境負荷の低減、リスクマネジメント等)や貢献の最大化(事業での貢献、社会貢献活動等)に関する取り組みについて具体的な事例を踏まえてご説明いただいた。株式会社ブリヂストンでは、事業による影響を最小化し、かつ、残った影響に対する貢献活動によってトータルでゼロ以上にすることを「生物多様性ノーネットロス」と考えられているとのことであった。また、影響の最小化としては、生産活動による取水や大気への影響だけでなく、調達段階や工場新設時においてもスクリーニングや簡易アセスの考え方を取り入れて取り組まれているとのことであった。

ご講演後のディスカッションでは、日本国内工場の生物多様性ポテンシャル評価の仕方、ノーネットロスの言葉を取り入れた経緯、環境配慮に対する国ごとの考え方の違い、活動の継続の工夫などについて議論がなされた。また、稲継様からは、経営層や従業員への働きかけの工夫として、活動の効果や継続性の明確なアピールが必要であること、全社的な目標の設定から具体的な取り組みへの落とし込みが課題であるとの説明があった。

ブリヂストンの取り組みにおいて、持続可能な社会の目指すべき3つの社会(自然共生社会、循環型社会、低炭素社会)のうち「自然共生社会」を第1に考えていること、長期目標に「ノーネットロス」を取り入れていることは、民間企業における生物多様性保全の取り組みとして画期的なものと思われる。一方で、生物多様性という言葉のわかりづらさや総合的評価の手法確立が課題であることがわかった。これらの課題は、本学会において議論が続けられてきたものであり、引き続き産官学が連携してアプローチしていくことで、生物多様性保全の取り組みのさらなる促進が期待できるものとする。(レポーター：株式会社オオバ 田中亨)